

この稿では、二〇二〇年という具体的な時期に置かれる状況を想像しながら、生活者が持つ不安や楽しみ、期待する生活像、住みたいところなどについての調査結果を報告し、考察を加える。

不安・心配ごと

将来の個人的な生活を思い浮かべてもらい、まず心配ごとについて尋ねた。質問内容は次ページの図1に含まれる二二項目である。

「心配である」、「どちらかといえば心配である」と回答したパーセンテージの合計で見ると、八〇%を超えたのが「エネルギー価格の高騰」(八一・四%)と「家族の病気や高齢化による介護」(八一・二%)であった。七〇%台が「自分自身の肉体的な健康」(七九・八%)と「生活を支える収入源」(七七・七%)、そして六〇%台には「食料

2020年、暮らし方への不安と期待

濱 恵介 Written by Keisuke Hama

の確保困難化や価格の高騰」(六七・三%)と「自分自身の高齢化による自立困難化」(六六・一%)が続いた。

自分自身の(肉体的な)健康について、女性は年齢が高くなるにつれ心配の度合いが強くなる傾向にある。一方、男性は、五〇代が「心配」と答えた比率が最高で、四〇代から六〇歳以上に上げていずれの年代も、「心配」、「どちらかといえば心配」の合計が八五%前後に達している。傾向に若干の違いはあるが、高齢化と健康不安の運動を確認できる。

自分自身の高齢化による自立困難化への心配は、当然のことながら高齢期にさしかかる六〇歳以上の世代で特に大きい。四〇代では二〇%台だった「そう思う」の比率が、六〇代以上では男性が四一・四%、女性では五八・八%になる。さらに、六〇代の前半・後半・七〇歳以上でも差があり、「そう思う」という回答比率が順に四三・四%、五一・〇%、六二・九%(男女合計)となっている。この傾向は、自分自身の健康の心配及び、家族の病気や高齢化による介護に関する心配とも類似している。

収入源に関する心配は、「そう思う」と答えた人が四七・八%と選択肢の中で最も多かった。収入は暮らし方を考える最も重要な要素であることと表れてある。年代層では五〇代男性が「心配」とした比率が五七・七%と際立っている。「そう思う」が半数を超えているのは三〇代男性と五〇代女性であり、ライフステージによる重要度の違いがつかえる。

食料の確保困難化や値上がりにより強く不安

に感じているのは、比較的若い女性層と五〇代の男性であった。子育て中の主婦層が食料品の値上がりに敏感なのは当然と思えるが、中年男性の不安の内容が同じかどうかは分からない。

原油・穀物価格の急激な値上がりで実感されるように、エネルギーや食料の確保・価格高騰への懸念が強く表れている。その傾向が全体の中で、これほど強く表明されたのは注目に値する。環境問題を背景に資源・食料問題が深刻な状況になり得ることは、既に生活者は強く認識している。

社会情勢や環境問題などについて

どちらかといえば、個人的な努力では如何ともしがたい大きな社会の動きについて心配の程度を質問した。選択肢は図2に含まれる一〇項目で、社会問題、環境問題、都市問題などが主な対象である。

「心配である」が過半数を超え、「どちらかとい

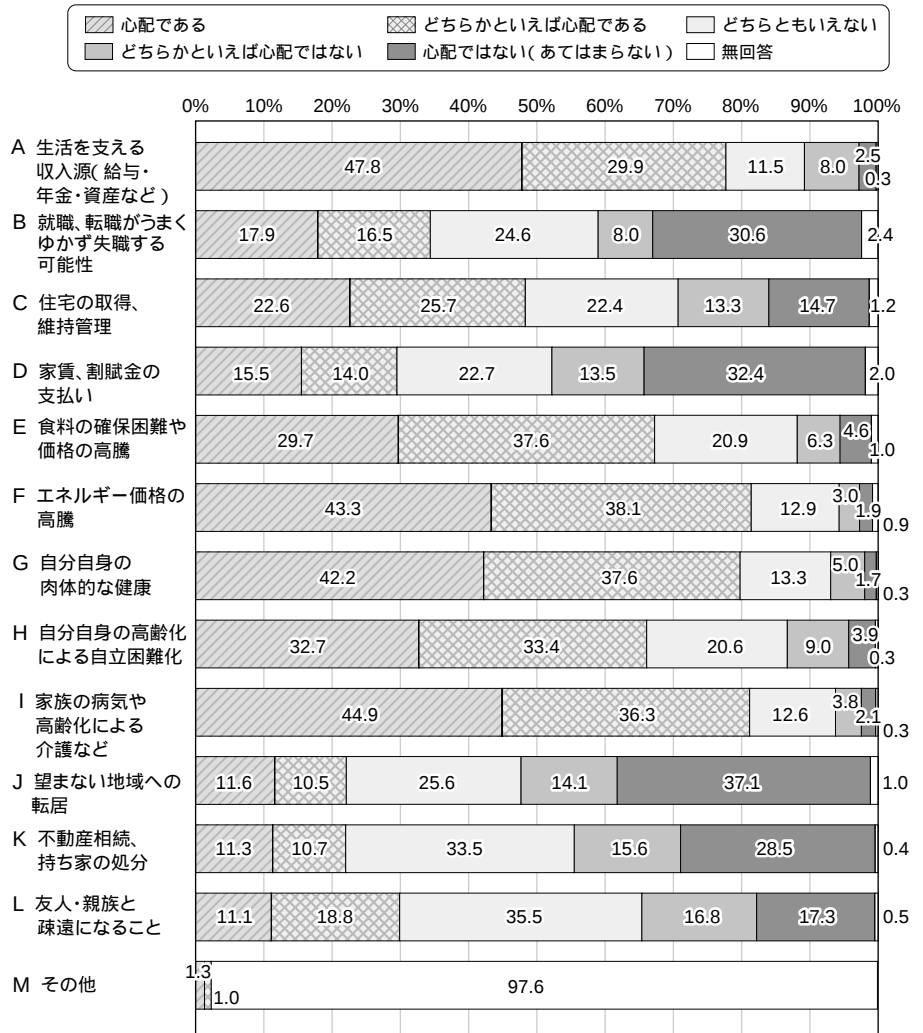


図1 あなたは2020年の暮らしでなにが心配ですか

えは心配である」を加えると八項目が七〇%を超えている。「地球温暖化の進行による気候変動・異常気象」については五九・〇%が「心配」で、「どちらかといえば心配」を加えた合計で九〇・八%が懸念を示した。同じく合計で同水準にわたるが、「生活を支えるはずの国・地方の行財政危機」である。中央・地方を問わず巨額に達した財政赤字の累積が国民の気持ちに重くのしかかっている。

突出した差はないが、合計で九〇%近くになったのは、「詐欺・凶悪犯罪などの社会問題」(八八・四%)、「ヒートアイランド現象の悪化と頻発する熱帯夜」(八七・〇%)、「地震や風水害など災害の脅威」(八六・一%)と続く。

その他、「処理問題の深刻化」(八三・〇%)、「格差の拡大・固定」(七八・一%)、「金属資源の枯渇と価格の高騰」(七五・七%)も、大部分の人が心配している事柄である。

一方、人口減少にともなう地域の衰退及び都市景観の混乱に関する項目は、相対的に心配の程度が低かった。同じく「心配」・「どちらかといえば心配」の合計はそれぞれ五五・六%、五三・三%にとどまった。それでも半数以上は、地域や都市が健全な状態が維持されるかどうかに関心を表明しているから、問題がないわけではない。

次に、世代・男女・地域などの差による傾向を見る。

最も興味深いのは、地球環境への懸念は女性が男性より強く感じている点である。「心配」と答えた比率が男性四九・四%に対し、女性は六六・六%もある。反対に「どちらともいえない」と、今なお楽観視している人の比率は男性で一〇・三

心配である
 どちらかといえば心配である
 どちらともいえない
 どちらかといえば心配ではない
 心配ではない(あてはまらない)
 無回答

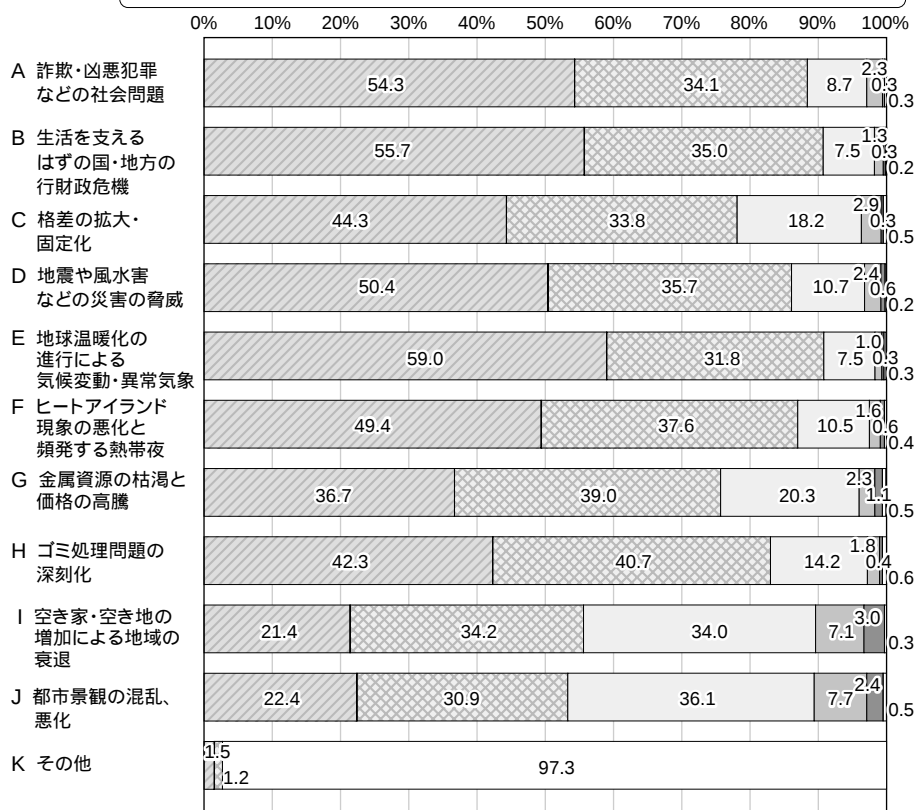


図2 社会情勢や環境問題についての心配

総数(n = 964)

とんだない。特に環境問題、行財政問題、社会不安、災害の脅威など現時点で既に顕在化している問題がより深刻化することを大多数の人が恐れている。

なお、自由記入欄に見られる「ヌントとしては、子・孫の世代がネット犯罪や社会悪の拡大・モラルの低下などの中で無事に生きて行けるのかどうかを心配する雰囲気を感じられた。要するに「社会の健全さ」が懸念されている。

長を見る(七五・一%)、「家族・仲間など人との交流を大切にする(七三・七%)」、「行きたいところへ旅行する(七二・一%)」であった。六〇%台はなく、五〇%台の回答に「調理や美味しい食事をする」、「趣味や勉強を充実させる」、「今より自由で、余暇が十分ある」が挙げられ、「芸術や芸能など文化に触れる」、「身近なまち歩きやサイクリングをする」が五〇%未満で続く。

子・孫の成長や人との交流が楽しみ、という平凡ともいえる期待が最も強い支持を集めたが、旅行や文化を楽しみとした比率も含め、男性よりも女性にその傾向が強い。

自由時間が増えることを楽しみにしている年代は、働き盛りまたは子育て中と見られる年代の選択比率が高かった。今は忙しいが、近い将来には時間のゆとりが出ることを期待する世代である。

調査項目を作成する段階では、子育てや仕事から解放され、時間的なゆとりが出る年代(五〇代以上)は、より積極的な余暇利用を楽しみにしているだろう、という予測があった。ところが、旅行・趣味・芸能・スポーツなどを最も楽しみにしているのは若い世代、という結果であった。

特に二〇代女性の積極的期待度には顕著なものがああり、「楽しみにしている」と答えた比率が高かった項目の例を次に挙げる(カッコ内は平均値を示す)。

「いきいきと仕事をしている」三〇・二%(一〇・〇%)、「家族・仲間など人との交流を大切にする」五五・八%(二七・七%)、「趣味や勉強を充

期待すること・楽しみなこと

前項までとは逆に、楽しみにしていること、期待していることを尋ねた。次ページの図3にある一七の選択肢について回答を得た。

前項と同じく、「楽しみである」、「どちらかといえは楽しみである」の合計で概観する。七〇%を超えた回答は、多い順に「子供・孫などの成



%あつたのに対し、女性は一五・二%のみである。

ヒートアイランド・熱帯夜は都市部に特徴的な現象だから「心配」と答えた比率が、大都市部で五四・八%、町村で四一・六%という差が出たのは当然として、地震・風水害などの災害の脅威への懸念も大都市において顕著で、「心配」と答えた比率が大都市で五九・七%、町村では三五・六%と、より大きな開きを示している。

全体的に見て、社会動向で心配でないことはほぼ

実さる「三四・九%（一七・七%）、「芸術や芸能など文化に触れる」三四・九%（一四・六%）、「行きたいところへ旅行する」五三・五%（一九・九%）などである。「調理や美味しい食事をする」という全体的に期待度の高い項目においても五三・五%（一六・六%）と突出して積極性が見られる。

現状に満足していることを示唆する答えとしては、「住みたい地域へ転居する」ことを「楽しみである」と答えたのはわずかに四・七%であった。住宅の新築やリフォームに関しては、その機会に遭遇する可能性の低さを反映して、比較的低い期待度にとどまった。

生活全体のイメージ

個々の心配や楽しみとは別な見方で、生活全体のイメージ（ライフスタイル像）を尋ねた。選択肢は図4に含まれる一である。

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計比率で概観すると、最も高い支持を得たの

は「何よりも健康が第一」で九〇・〇%。次いで「自然や地球環境を大切にする」が七一・三%で「便利・快適」、「今とあまり変わらない」、「趣味・娯楽」、「簡素・謙虚」が六〇%台で続いている。「健康」は誰にでも共通の願いであることから別格として、「自然環境を大切にしながら簡素・謙虚に暮らしたい」という希望が強く支持されている。

健康指向と環境保護は、年代が高い方が「そう思う」の比率が高いといえるが、質素・謙虚な

暮らし方については、より顕著な傾向が見える。同時に、「便利で快適な暮らしも欲しい」という方向性が違う願望を同時に求める生活者像が描ける。双方を可能にする生活環境や技術、それに生活スタイルが必要なのだろう。なお、便利・快適指向については、年代や性別による差異はほとんど見られない。

興味深いのは、便利・快適を求めるグループが自然を大切にすることや簡素・謙虚に暮らすこと

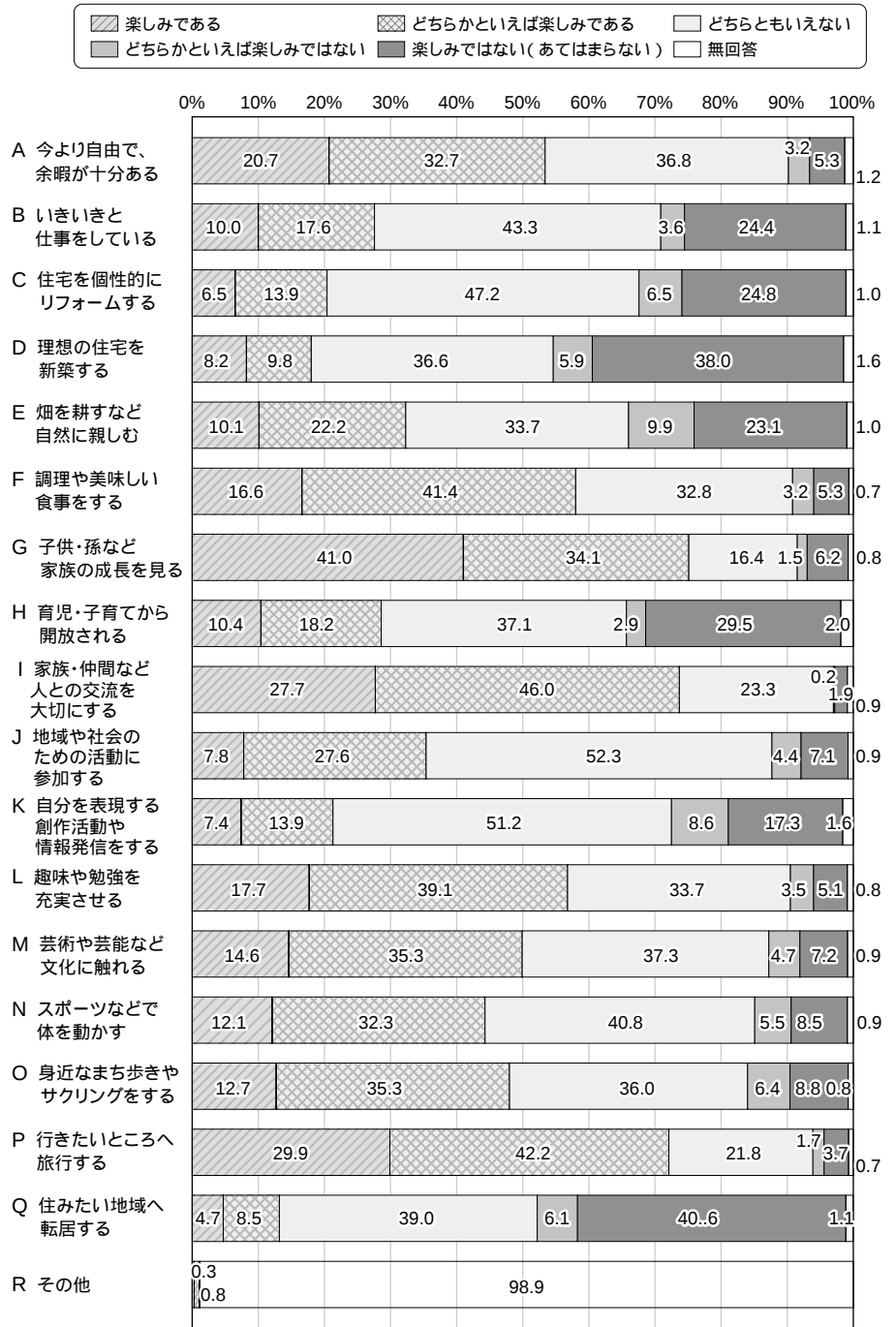


図3 あなたは2020年の暮らして何が楽しみですか

総数(n = 964)

そう思う
 どちらかといえばそう思う
 どちらともいえない
 どちらかといえばそう思わない
 そう思わない
 無回答

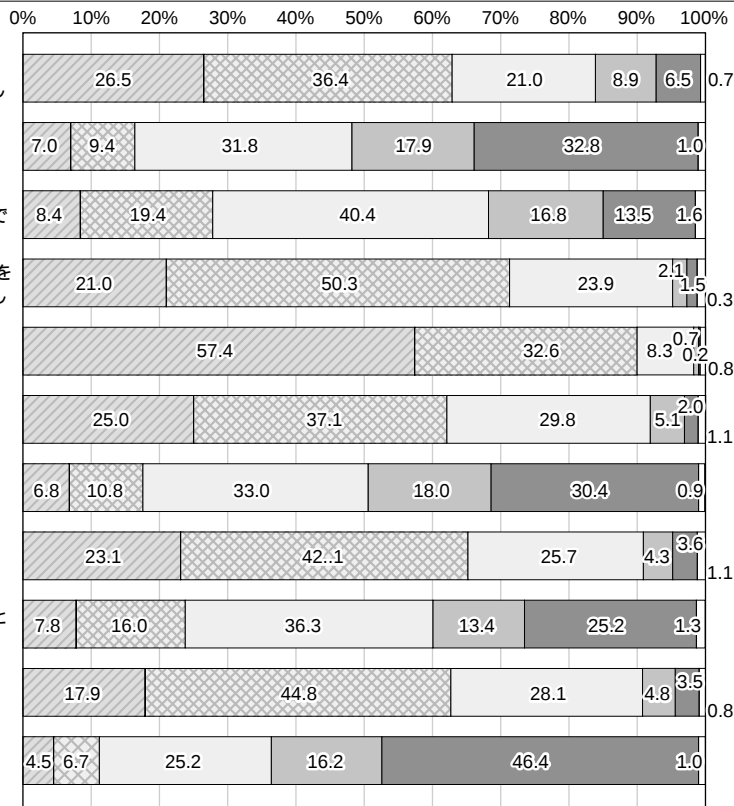


図4 あなたは2020年の暮らしで何が楽しみですか

総数(n = 964)

に共感していることである。片方を捨てるのではなく、一見相反するような要素を同時に求めている価値観が見てとれる。便利・快適は捨てないで「ロジカルな暮らしを望んでいる」と言えそうだ。

一方、「今とは大きく違う暮らし」への支持は平均値で非常に低い。「今とあまり変わらない」ことの四分の一程度しかない。しかし、年代別の差が大きく、高い年代ほど現状是認の傾向が強い。それとは対照的に、今と違う暮らしを求める比率

見極めには約二三〇件の書き込みがあった。頻出するキーワードを多い順に並べると、健康、趣味、自分、家族、食・食事、友人・友達、仕事、旅行、時間、環境、自由、お金・金銭、自然……と続く。

共通的に寄せられる関心の対象は選択肢とほぼ重なるが、書かれた内容には、それぞれの生活者が抱く理想のライフスタイルに寄せる熱い思いが感じられた。

は「どちらかといえば」を含め、二〇代男性で三〇・八％、二〇代女性では四二・九％にも上る。若い人が今とは別の世界・暮らしに憧れるのは当然のことだろう。異文化での暮らしも退職後の憧れではなく二〇代に支持が多い。「仕事が生きて甲斐」と答えた比率は二〇代男性で最も高く、「どちらかといえば」を含め五〇・〇％。同様に二〇代女性と三〇代・四〇代男性が約三〇％支持している。

暮らしたい場所・まち

あなたは二〇二〇年(今から二二年後)に、どのようなところで暮らしたいですか、という質問に対する選択肢と回答は、次ページの図5の通りである。

回答の状況をまとめると、「緑が多い落ち着いた住宅地」という回答が最も多く、「そう思う」が四・三％、「どちらかといえばそう思う」が四・二〇％、両者の合計が六・六・三％に上る。同様の見方で二番目はかなり差が開き、「田畑や森など豊かな里山・農山村」が三・一・六％、「古くからある伝統的な街・都市」が三・一・〇％で、歴史や自然への志向の強さが感じられる。

一方、「都心に近く便利で賑やかな市街地」は「そう思う」が二・一・三％と比較的高く、「どちらかといえばそう思う」一・七・七％を加えて三・九・〇％の支持を得ている。

最も不人気だったのは「最近開発された新しい郊外住宅地」で、「そう思う」と答えた人はわずかに一・五％。「どちらかといえば」を加えても一・〇・八％にとどまった。それを裏付けるように、「そう思わない」と答え、はきり離れた人の比率が三九・四％に上っている。

その中間にあるのが「職・住・商混在の下町風の街」と、海や山など自然が近いリゾート地で「どちらかといえば」を含めた支持がそれぞれ二六・〇％と二七・一％であった。

「生活費が安く暮らしやすい海外」を前向きに選んだ人の比率が「新しい郊外住宅地」を上回っ

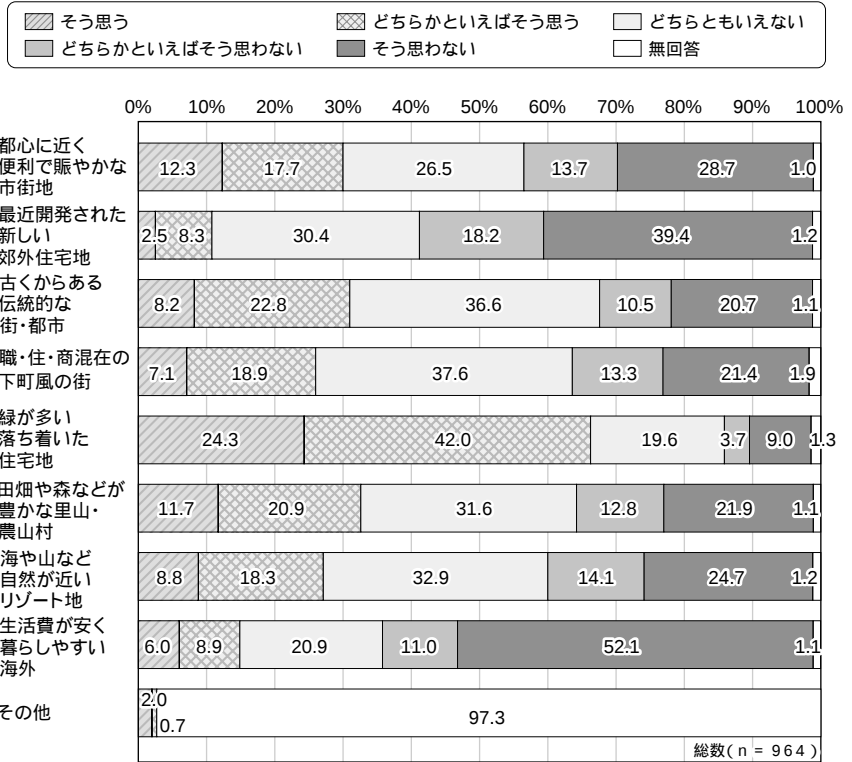


図 5 あなたは2020年(今から12年後)にどのようなところで暮らしたいですか

高まっているのだ。前回「そう思う」と回答した比率をAからGの順で掲げると、九・一％、二・二％、五・一％、四・六％、二・一％、九・七％、六・五％である。単純に合計すると五九・五ポイントだったものが、今回は七四・九ポイントに急上昇している。

想定する時点が一〇年後から二三年後に延びているが、より明確に居住地の希望を表す理由は何だろうか。より明確なビジョンを得たのか、それとも現状で満足し移住は考えにくいのか、いずれにせよ社会の安定ないし居住地の熟成を感じさせる結果である。

み・期待がある。

その一方で、地球温暖化の深刻化、凶悪犯罪に代表される社会不安、食料や燃料の急激な値上がりなど、今年になってから未来への暗雲がより強く意識され始めている。調査時点では、ガソリンが一リットル一八〇円を超え、漁船が燃料費高騰に抗議して一斉休漁するような事態はまだ起きていなかった。しかし、調査結果は生活者が資源・食料不安の兆候を敏感に感じ取っていることを示している。

二〇二〇年の楽しみの実現は、ほとほと時間とお金があれば心がけ次第で実現可能なものが大半と見られる。それに反して不安要因は、個人の努力だけでは解決できないものも多い。より望ましい生活の実現には、社会全体を良くする政策や市民全体の前向きな参加が必要なることを裏付けている。

おそらく、これからの一〇年余りは、日本だけでなく世界が資源の希少化と地球温暖化の問題に直面しつつ、まともな暮らしの存続をかけた様々な試みがなされる期間となるだろう。格差などがひき起こす社会問題への不安も顕著で、社会の健全な回復が問われている。これらの問題を解決できるのかどうか未知数であるが、一人ひとりはより良い未来を信じて進むしかない。

調査結果は、生活者の期待とこれから社会が解決すべき問題の所在をより明確に示してくれたと思う。有効な解決手法を見出すため、参考資料として多様な分野で役立てていただきたい。

(大阪ガス株) エネルギ―文化研究所 研究主幹)

たのは興味深い。ただし、海外居住を「そう思わない」とはっきりと否定する人が半数以上あるのも納得できる。

実は、同様の調査を三年前にも実施している(季刊誌「CEE」七五号、二〇〇五年)。ただし、「一〇年後にどこに住みたいですか」という聞き方で、「H」生活費が安く暮らしやすい海外は、今回追加した項目である。

前回の調査結果との比較で注目されるのは、「そう思う」とはっきり希望を答えた比率が軒並みに

二〇二〇年はすぐそこ

今年(二〇〇八年)から二〇二〇年を予想するのは、大部分の人にとって空想や夢物語ではない。現実を基点に現実的なプログラムを持つて一〇年とちょっと後を考えることと判断できる。不安を抱えながらも、各個人には実現したい楽し